

大乘仏教の振興とその源

大乘仏教の源は釈尊

大乘仏教の經典の成立は、先に述べたように世紀前一世紀くらいからで、その最初は般若系統の經典で、ついで法華經やその他の經典が文字化をして成立したといわれています。

けれども、これらの經典は文字化の以前は口から口へと伝えられ記憶にとどめてあったものが次代に伝えられていったのです。しかも、正確にいえばどのくらいの期間を経て文字化をされたかは、知る由もないのですから本当の經典の成立の時期は謎に包まれたままです。けれども、釈尊の時代には存在をしていなかった歴史上の事実や地名などがその經典に出てきた場合、例えば仏滅後百年以上たって即位したアショーカ王の名前や故事が出ている經典なども經という名前で存在しますが常識的にいって後世の成立であることは疑いようありません。しかし、前に述べましたように、經文が文字化した時点での經典そのものの成立とその經典の中核となっている思想は成立が別の時期のはずです。

大乘經典それ自体の文字化は歴史的に新しくても、その思想的淵源が釈尊に帰せられるのであれば、一言一句が直接の説法ではなくとも釈尊の金言といえるのです。けれども、思想史的に追求していったとき、明らかに西方のペルシャの宗教の直接的な影響を受けて成立した阿弥陀仏の信仰を説く浄土經典、仏教とヒンドゥー教との習合、あるいは仏教のヒンドゥーへの回帰ないし俗化によって釈尊の根本精神を失ってしまい、しかも經典の成立自体が極端に遅い密教（大日經や金剛頂經は7世紀の成立、密教經典を所依の經典とする宗旨は真言宗）は仏教の仮面をかぶった異教といえるのです。

現存の經文は、インドの古代の雅語（文語）であるサンスクリットではあっても俗語の形態を残している仏教梵語（仏教混淆サンスクリット ブッディスト・ハイブリッ

ド・サンスクリット)で書かれているもの、同じインドの俗語プラークリットで、古代語であるパーリ語で書かれたものと、中国訳をされた漢文のもの、チベット語のもの、モンゴル語のもの、その他中央アジアの言葉で書かれているものなどさまざまです。しかも、古代インド語であるサンスクリット、あるいはパーリ語にしても釈尊が御法門をお述べになった言葉とは別であるということにははっきりしています。では、どんな言葉でお話をされ御法門をお説きになっていたのかというと、やはり俗語プラークリットの一つである古代マガダ語といいます。これととも、釈尊が伝道の旅を続けられ教化をされた地域であるガンジス川流域、その中には当時栄えていた王舎城(ラージャガハ、ラージャグリハ)や舎衛城(サーヴァッティー、シュラーヴァステイー)等がふくまれるかなり広い地域で強大な国家であったマガダ国近辺で使用されていた言葉ということの意味するに過ぎません。文献として現存するものは一切なく、具体的に、こういう単語があり、このような文法であったというのではないのですが、パーリ語にきわめて近く、パーリ語にはマガダ語の痕跡が残っているとされています。ただ、インドのジャイナ教という宗教(開祖はマハーヴィーラといい釈尊とほぼ同時に活躍、教理的にも仏教にやや近い宗教で極端な不殺生を戒律としておりインドには現在も信者がいる)の文献のほとんどは同じ俗語プラークリットである半マガダ語(アルダ・マーガディー)という言葉が使用されています。この言葉については研究されていて、辞書なども出版をされています。学者によっては、釈尊はマガダ語ではなくジャイナ教同様にこのアルダマーガディーを使用されたとしています。

ともかく釈尊が話された言葉であるというマガダ語の経典はただの一部も残っていませんので、残念ながら真の意味での直説は現存はしていないのです。しかし、だからといって釈尊の思想なり、真精神が伝わっていないとはいえません。大体、律蔵の中に説かれていることですが、ある比丘が他の僧侶達が各自めいめいの言葉で経文を誦しているのを見て、釈尊に経典の言葉をサンスクリット(ベータ語)で統一したらどうでしょうかと提案をしたところ、釈尊はこれを排して、決してサンスクリットを

用いてはならない、それぞれの自分自身の言葉で経文を習い覚えるように教えられたとの記述があるのです。

これも、日蓮聖人が御弟子に京都の都言葉を使ってはならない、関東の田舎の言葉を使いなさいと教えられたことと全く一致しています。経文は口から口へと伝えられ、その際、方言から方言へ、ある言葉からある言葉へと翻訳され置き換えられていったでしょう。その翻訳の時に、あるいはたとえ話が挿入されたり、新しい言葉、例えば釈尊のなくなられた後しばらく経った時代に使われていたお金であるとか、ある時代を表わす特殊なものの名称が経文の中に混入することはあり得ることです。けれども、そうしていくうちに文字になって固定された経文に釈尊の言い残されようとした根本の教えが残されていないとはいえません。

さて、以上のように考えてきますと大乘仏教の源は、釈尊の教え、釈尊の説かれた法、釈尊ご自身に求め得るのです。

以前にも記したように出家中心の仏教とは別に、釈尊の時代から出家ないし在家を超越した立場で教えを聴聞した人々の思想の流れがあり、ある時はそれがジャータカ物語となって釈尊の前世を語らせたり、ある時は仏塔を信仰させたり、ある時は厳格な戒律に反対を唱えしめ、ある時は大乘仏教運動を巻き起こし、後代になりませんが仏像を造り崇拜させたのであろうと思われまます。ただし、大乘仏教の源と目されている大衆部は後世になって大乘仏教が盛んになっても、なお部派仏教の一派として存続していた証拠があり、なおかつ大乘仏教教団というべきものが釈尊のご入滅以来ずっと存在をしていたかということ、これは証拠がありません。ですから大乘仏教は文字となった経典としてでも多くの修行者が集まった教団としてでもなく、むしろ、これらを超越している普遍的な仏教本来の思潮、思想として釈尊という源泉から滔々と流れだし、それが脈々と伝わっていったのです。

大著「大乘仏教成立論序説」を著わした山田龍城博士は仏教の根幹は「ダルマ」（法）とブツダ（仏陀）その人、さらにサンガ（僧伽）・・・すなわち三宝であり、大乘仏

教はそれらのいずれについても深く追求しているとしています。

特に法について言うと、釈尊が説かれた教えで最も大事な点は、ダルマに含まれる事柄として 中道、般若、三昧（深い瞑想）、ブッダについては 慈悲、菩提（さとり）、僧伽については 在家（出家、在家平等主義）という六つの事柄が釈尊自身の教説であり、（註）

「部派仏教時代にはこれらの要項が後退して仏教の本義が失われる傾向を示したので大乘仏教運動によって取り戻されたにすぎない。その源流を尋ねるならばゴータマの根本教説に由来することは疑うことができない。しかし、このような大乘運動がいかなる経路を通過して、盛り上がって来たのか。これに対する解答について、古来のあらゆる仏教の記録はこれを語っていない。この課題を明らかにするためのいかなる資料も外に持っていないわれわれは、大乘の聖典を別にして目的の達せられる見込みは立たぬ。我々は聖典の中からこれを発掘する以外に道はないのである。」と述べられています。（講座仏教第3巻、インドの仏教「大乘仏教の興起」、大蔵出版、昭和42年）

そうして、特にこの項に関係の深い僧伽について、原始経典でその名前が知られているウバソク（男性の在家信者）は11パーセント、ウバイ（女性信者）は4パーセントでゴータマと深いつながりを持っていたのであり、教えられる道に差別はなかったとし、後代の弟子教団になると、ダルマの伝持が長老を中心とする比丘に任せさらに部派になってこの傾向が助長されたのであるから、大乘仏教においてウバソクとしての維摩居士やウバイとして勝鬘夫人が大乘経典において表面に進出してきたのを始め在家の人々の存在が重みをましてくるのは原始教団の姿に帰ったことになるのであると述べています。

以上の説によれば、大乘仏教の思想自体の淵源が釈尊自身にあることは明白であろうと思います。

また、大乘仏教の思想の重要な観念である「菩薩」にしてもすでに釈尊の前世につい

ての説話であるジャータカ物語の中に本生の菩薩として説かれており菩薩の修行すべき六波羅蜜（布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の六つの徳目）のうち忍辱をのぞく五波羅蜜にしても原始経典にその名称が出てくるのですから、やはりこの点からも大乘経典は釈尊の真意を伝えた経典であるといえるのです。

特に法華経における諸法実相の思想、久遠本仏の開顕と上行菩薩の出現によって明らかにされる法華経の仏身論と菩薩に関する説、また御題目の信仰につながる受持行などの修行論は他の大乘経典や阿含経典とは明らかに異なる独自性を持つものであると同時に釈尊の時代に発する仏教の根本教説を再現したものであり、一切の経典を統一し、超越する思想であるのです。

本稿で問題とするのは「信」ということですが、「信」には信ぜられる対象である仏と信ずる人（修行者）の問題、さらに信と修行の位置づけ、関係といったことが重要になってくるのですが、これらの諸問題に対して釈尊の真意を明かすという観点から説かれたのが法華経です。

大乘経典の成立は文字化をされてほぼ現在のような形になったのは近代仏教学の文献学的方法によって確定することはできるといえるますが、それ以前の経文が口誦されていて口から口へと伝わっていた時代がどのくらい続いていたのかははっきりしないのであり、大乘経典にしても経文の口誦は釈尊時代から連綿と続いていたと言っても全く否定することはできません。少なくとも思想的には、そう言えることは上述のように間違いのないところです。だから法華経にしても、その根本の法華思想は釈尊の正系の思想として口から口へと伝わる経文の中に存在をしていたのであって、それらが時代とともに増広を繰り返して現行の経文の状態となったとき、文字化をされ固定したということです。

大体、釈尊当時には文字はインドになかったとのことで、歴史学者ウエルズは「釈尊の当時、インドにはまだ文字なるものは全くなかったらしい。実際、ギリシャのイリアッドですら、この頃には、まだ文字に記されていたかどうか疑問である。後

の時代における、たいていのインド文字の根底となった地中海型アルファベットは、まだインドには達していなかった。」と述べています。

しかし、よく調べてみますと文字の歴史は意外に古く、エジプトで作られた象形文字である神聖文字・ヒエログリフやメソポタミアで作られた楔形文字は紀元前三千年頃からあったといわれています。また、紀元前十二世紀頃、フェニキア文字が発明され、このフェニキア文字がアラム文字となり、これが紀元前8世紀頃に古代印度にもたらされ、次第に発達してブラーフミー文字となり、その後南北両系に分かれ多数の書体を産み出しました。そして、そのうち、四世紀頃、グプタ王朝時代にブラーフミ文字は変化して直線を主としたブラーフミ文字から曲線を用いた形の「グプタ文字（またはグプタ型ブラーフミ文字）」に変貌し、やがて今日のデーバナーガリー文字や諺法諸宗のお位牌の上方に記されている悉曇文字となりました。

ですから、文字がなかったから経典が文字化されなかったのではなく、神聖な経典は音声としておくべきで、文字にしてはならないと考えられていたという説が有力です。

紙の場合は、後漢の和帝の時代、西暦105年に蔡倫という人が作り始めたのですから、まだなく、経文が文字に移されていったときには貝葉というものが使用されました。貝葉というのは、多羅樹（ターラ）という木の葉で、そこに文字を堅い物質をとがらして書き、傷をつけ、そこに果汁を流し込み拭き取り乾燥させたもので私もたった一枚だけ持っていますが、いまだに文字がハッキリ判別できます。これを貝葉経、貝多羅経といいます。

八宗の祖と仰がれるインドの龍樹（ナーガルジュナ AD・150～250）菩薩は大智度論の中で、大乘の法は経、律、論の三蔵に説かれる声聞法（声聞とは読んで字の如く釈尊の声を直接に聞いた弟子という意味、大乘では声聞を利他心のない二乗として縁覚乗の人々とともに非難の対象とする）とは主旨が違うのであり、別に説かれたのであり、大乘経は経文に属するけれども三蔵の中に含まれはしないと述べているの

です。さらに、龍樹は大乘法と声聞法とは仏意をともに伝えてはいるが聴き手に別があるために区別されるのであるとされています。

外国の学者、スタニウラ・シャイエルは大乗教は小乗の後に続くものではなく、ブッダの時代からすではっきりと存在をしていたといい、江戸末期の浄土宗の普寂や敬首は釈尊の説のうちの一部がひそかに伝えられ展開をして大乗仏教になったとしています。また以前には学者の中で同様に大小乗別源説を唱える人があったのですが、これは誰も積極的に否定をすることができないと同時に歴史的証拠をもって論証をすることもできません。

ただ、学者や他宗の僧侶の説はさておいて、蓮隆扇三祖等の先師の説は勿論のこと、御祖師様が内心では全てをご存知ではあったが時機に鑑みて上行所伝の御題目の尊いことまでは秘して明かされなかったけれども（内鑒冷然、外適時宜）法華経の弘通をされたということで先聖として尊崇をされていた龍樹菩薩や天台大師等の説は尊重しなくてはなりません。いずれの説も根拠があっただけでいわれているのであり、たとえ伝説に過ぎないように思われる事項でも、案外に真実そのものであることや真実に基づき伝説化されたことが多いからです。釈尊の实在や舍利の八分説、その他どれだけのことが疑われてきたか分かりませんが、多くのことが真実でした。西洋のトロイの木馬伝説にしても同様です。ただし、明らかに歴史上の新証拠などにより考え方を訂正すべきことがあれば、訂正しなくてはなりません。この点については先に私の考え方を申し述べました。

大乗経典はグループの作品という説

さて、もう一方では、あくまでも大乗経典はある時代に覆面の作者が突然に釈尊の名をかたって作り出したという考え方もあります。確かに中にはそれが当てはまる場合もあるのですが、大乗経典一般についてはそうは言えません。歴史の中でのなんの脈絡もなく、突然に現われた経典がどうして仏教徒の中で釈尊の教説として受け入れ

られていくのでしょうか。やはり、大乘經典が釈尊の肉声をテープレコーダーのように一言一句を記録したという意味での直説であるとは言えないにしても大乘經典の成立には思想的な基盤や歴史があり、その方向性の中でもし、編纂をされたものなら仏説として認証をされるでしょうが、そうでなければ埋もれてしまうか偽經としての烙印を押されてしまう運命にあるでしょう。

現在では經典の成立にはやはり、ある編集者やグループが関わったのであり、それには当然その經典を生み出す下地があり、釈尊の真意を掘り起こすために歴史の中で必然的に成立したのが大乘經典であり、部派仏教によってすっかり、出家主義的になり専門的になり過ぎていた仏教の改革を推し進めたのが大乘仏教運動であるにとらえられているようです。

以上のような線で、大乘經典をあくまでも文献学に即して研究した場合、現在としては大乘經典なり大乘運動がいったいどこから起ってきたのかは十分には明らかではないけれども、大局的にみた場合、平川博士は大乘仏教の三つの源流として

部派仏教からの発展

仏伝文学 讚仏乗の流れ

仏塔信仰

以上が大きな源と考えると大過はないであろうとされておりす。

これらのひとつひとつが重要なことですが、特に法華經と仏塔信仰との関係はきわめて深く、四信五品抄の中にもこれに関連する事柄が出てきて大きなテーマともなっていますので、これについては後に言及しようと思います。

註

ちなみに、同氏の解説によれば

中道は釈尊が菩提樹のもとで悟りを開かれた直後にはじめ、ともに修行をしていた5人の比丘に対して最初の説法（初転法輪）が鹿野苑で行われたが、その時、依然として苦行を続けている彼ら5人に説かれた法門の内容であり欲楽にふけることと苦

行に専心する非を諭された中道の教えが根本であるとする。

後、中道はこの苦楽中道と断常中道、有無中道などが説かれるにいたり、龍樹菩薩は八不中道を中論において展開をしており、仏教の根本説とされた。中国の天台大師、妙楽大師など天台宗においても深くこの問題が追求された。

般若とは智慧と訳される。パーリ語聖典のスッタ・ニパータ（経集）に「タンハ一（本能、渴愛）の流れをよく乗りこえさせるものはパンニャー（般若）である」と説かれ、諸処に般若の智慧について言及される。従って大乘において、六波羅蜜の最後の徳目として般若波羅蜜が置かれたのは全く不思議がないとしている。

三昧とは瞑想であり、般若の智慧を身につける法であり、原始経典には特に、三三昧として、空、無想、無願三昧が説かれるが大乘の般若経はこれを中核となすとしている。なお、法華経にも三三昧は説かれている。

慈悲は空三昧の一つである無量三昧の内容である、この無量三昧は阿含でも最も重要視され、大乘経典でも「仏心とは大慈悲心これなり」と説かれ共通しているとしている。

ボダイとは悟りであるが、仏教のあらゆる教えの根本は釈尊の菩提であり、師である釈尊が実現した「ボダイの光が言葉より先にその人格を通して弟子達に伝えられた」のであり、阿含には多く説かれてはいないが、その全体を貫いているのがボダイであり、大乘ではこれを強調したとする

水野弘元博士は「小乗といわれるべきものは形式的な部派仏教だけであって、原始仏教や根本仏教といわれる初期の仏教は小乗仏教とすべきではない」とした上で、「仏教を釈尊の真精神に復帰させようとして、仏滅400年の頃から大乘仏教が唱導された。」と述べて大乘と小乗（部派仏教）の違いについて対比をされている。

（仏教用語の基礎知識 春秋社22頁）



小 乘 仏 教	大 乘 仏 教
阿羅漢となることを目的とする 声聞思想（声聞乗）	仏陀となることを目的とする 菩薩思想（菩薩乗）
業報輪廻の苦を離れようとする 他律主義（業報思想）	成仏の願行のために自ら願って 悪趣に赴く自律主義（願行思想）
自分だけの完成や解脱のために 修養努力する自利主義（小乗）	一切衆生を救済し社会全体を 浄化向上させる利他主義（大乘）
聖典の言句に滞り事物に拘泥執着 する有の態度（有）	般若の智慧による無我無執着の 空の態度（空）
理論的、学問的傾向が多く、その 理論には実践と無関係のものもある （理論的）	理論や学問より信仰実践を重視する その理論は空理でなく、実践の 基礎としてのもの（実践的）
出家専門的であるにかかわらずその 境地は世俗的な低いもの （低俗の出家仏教）	在家、大衆的であるにかかわらず その境地は第一義的な高いもの （勝義の在家仏教）